
現代美術における山水思想の再定位——香港 M+美術館「山鳴水應」展に見る越境的文脈

王安好（沖縄県立芸術大学）

山水画は中国の伝統的な風景画として広く知られているが、その本質は自然描写を超え、哲学的世界観の可視化にある。「道」や「玄」といった観念、儒・仏・道の三教思想の交錯を背景に、山水画は外界と内面を媒介する象徴的空間として発展してきた。だが、グローバル化、ポストヒューマニズム、テクノロジーの進展が進む現代において、「精神的風景」としての山水の理念は新たな読み替えと変容を求められている。

本発表では、2024年に香港 M+美術館で開催された「山鳴水應」展を中心に、出展作家である楊詰蒼（1956～）、唐家偉（1957～）、徐冰（1955～）の三者を取り上げ、山水的な思想が現代美術の語彙の中でいかに継承され、再編されているかを考察する。

楊詰蒼の《白描芥子園》は、古典画法書『芥子園画伝』を参照しつつも、人間と動物の種的境界が曖昧なユートピア的空間を描く。そこではダナ・ハラウェイの「伴侶種」的倫理に通じる脱人間中心主義の思想が具現化され、伝統的な「静」と「調和」の価値に対し、新たな身体性と欲望の政治が提示される。唐家偉の《靈山》は、筆ではなく指で墨を操る独自の手法を通して、気の流れと精神の内的風景を表出させる。統合失調症という個人的な条件を抱えつつ制作された作品は、アウトサイダー・アートとしての文脈とも接続し、「魂のかたち」としての山水に新たな意味を与えている。徐冰の《喜馬拉雅文字寫生手稿》は、漢字による山の輪郭の再構成を通して、視覚と意味の二重性を備えた空間を作り出す。ここでは、「読むこと」と「見ること」が交差し、言語と風景が溶け合う現代的な山水が実現されている。

これらの作品に共通するのは、山水の根底にある思想性を、必ずしも「伝統的」文脈にとどまらず、むしろ現代において問い直し、翻案する態度である。とりわけ香港という中国本土とは異なる国際的な舞台において、山水思想は西洋的視座を介して再編されながら、東アジアにおける「感覚と思索の融合」として再提示されている点は見逃せない。

本発表では、以上の三者の比較を通して、山水画が現代美術において倫理的・身体的・言語的な諸問題と交錯する装置として機能し得ること、またそれが伝統／現代、西洋／東洋といった二項対立を超える思考の可能性を開くことを明らかにする。